
SOULEATER番外編-嵐の文化祭-

コ－ユ－

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

S O U L E A T E R 番外編 - 嵐の文化祭 -

【Nコード】

N 1 4 0 5 A

【作者名】

コピー

【あらすじ】

S O U L E A T E Rと名無しの物語の主人公たちが通う「県立豊北高校」にて高校最大の体育祭＋文化祭を一緒にした「豊北祭」下克上、裏切り、欲望渦巻くヤリタイホウダイのお祭りの始まりです。時代設定は各お話の一年前です。

文化祭（前書き）

一話完結形にするつもりです。

文化祭

文化祭 それは年に一度の無礼講の日。
学校公認のイベント。

朝から何だかそわそわとした教室は、なぜかいるだけで気分が昂ぶる。

「よお、今日って文化祭だったんだな」
などと俺の机に座って話しているのは同じクラスの 野村 勇
二。

「だな、おれも今さっき気が付いた。」
あつはつはつはと笑ってみる。

うつ、なんだこの大量の冷たい視線は…
「仕方ないよな、俺たち手伝いあまりしてなかったしなあ」
遠い目をして呟く野村。

「失敬な、俺は手伝ったぞ？大量にケーキを用意したり、服の素材を探してきたり、周辺の家からフリーマーケット用の不用品を掻き集めたり…」

「そりゃご苦労さん。でよ、話し聞いてるかぎり何やるんだ？ウチのクラスは？」

「そついえばそうだな何するんだろ？」
あははと笑いながらクラスを見渡す。

また、冷ややかな視線が…
「止めよう。村八分にされる…」

その言葉に
「だな」

と小さく同意する野村。

「それはお前のせいだ南」
と、後ろの席の生徒が声をかけてくる。

「ナンデスト？」

「出し物は投票で決めることにしたろ？」

ウム、その通り。ちなみにうちのクラスは40人。

「で、だな、内訳をいうと」

食い逃げ喫茶13票

着たい放題！貸衣装屋13票

持ち逃げ上等！フリーマーケット13票

「こんな感じ」

また、えらく個性的な出店すること…

食い逃げ喫茶に持ち逃げ上等ですか…

いったい何を考えてるんだこのクラスは。

「さあ、今すぐ投票してくれ」

白い正方形の小さな紙が渡された。

「あ、名前はいいよ、匿名だから」

この状況で匿名って意味あるのか？

「書けたか？」

ずいっと投票箱が出された。

「待って、もうちょっと。」

喫茶店は女子に人気があつて、貸衣装屋は男子に人気で、フリーマーケットはほぼ半々となつていようだった。

何でわかるかつて？

後ろで出し物のコールが聞こえるから。

「喫茶店！喫茶店！」

とか。

「ああ、うるさいな…」

そう思うも頭にこないのは、やはりお祭りの雰囲気があるためだろうか？

ささっとペンを走らせ投票箱に入れる。
すとなつ。

わりと控えめな音が響いた。

いつのまにか教室が静まり返っていた。

みんな箱を凝視している。

頼む、そんなに期待しないでくれ…

確実にクラスの三分の二は敵に回すんだから

もつともらしく箱のなかを掻き混ぜる生徒。

そしてついに読み上げられる

「出店するのは……」

文化祭（後書き）

三つの店の話は全部やりたいと思っています。
しもゝ」て感じで

「も

嵐の喫茶店L・U（前書き）

ずっと前に作るだけ作って放置しておいた小説です。
後半、「名無しの物語」の登場人物が出てきます。

嵐の喫茶店L・U

「喫茶店に決定しました!」

どつと沸き上がる女子と一部の男子。

「さつすが南くわかつてるなあ」

何ていいながら背中を叩く。

バシバシ。

バシバシバシ

いてて…。手加減ないのな…。

ゴス!

「っ!はあ!」

なんだ!? 今のはグーだったぞ!?

一気に肺から空気が抜けて、むせこむ。

「さつすが南く女子の味方だなあ」

叩いたのは相川 樹。

「やかまし」

ごすつと音がして崩れ落ちる樹。

とたんに

「うおおおお!」

と歓声上がる。

「見たか今の!」

「見た見た!すげえアッパーだった」

「ばっかフックだろ?」

「いや、フリッカーだった」

いきなり雰囲気が変わった…気がした。

そうこうして文化祭が始まった。

俺たちの出店は

「喫茶店Ｌ・Ｕ」

学校公認の食い逃げ店で、逃げ切れればただ。

しかし逃げるまでに俺たちに捕まったら二倍払うという店だ。

武器の使用は禁止。

取り押さえればこちらの勝ち。

そして、支払いにきた人数Ⅱ立ち寄った人数とカウントされ、来客が一番多かったクラスは自分のクラスの売り上げをそのままもらうことができる。

そのためみんな必死だ。

手にバンテージを巻き、人によっては肘とかにテーピングを巻いたりしている。

開店時間は１０時。

俺たちは控え室で客の様子を確認する。

「去年はレスラーみたいな奴が一人で全員のしで行っちまったんだよな」

しみじみと語る。

「ああ、あったあった！その後がら空きになった隙にたくさん食ったなあ」

どこか遠い目をして呟く生徒。

モクモクモク：女子が落として型崩れしたイチゴショートを咀嚼する。

「ところでさあ、なんでＬ・Ｕなんだ？」

ウム、型は崩れても味はいいな

サク、サクサクサク：

クッキー生地のケーキをかじる。

「あー、それな、何でもロング・アッパーで意味らしいぞ」

頭をぱりぱり搔きながら答える。

「誰だ？そんな物騒な名前にしたのは…？」

「あいつ」

と今だに違う世界に旅立っている人物を指差した。

「…やりかねないな」

コクコク…差し入れのレモンティーで喉を潤す。

ウム、なかなか美味かった。

「だろ？…？」

名付け親らしい相川は、今だに頭の上でお星さまが飛んでいる模様。

あちゃあ、ちよつと強くやりすぎたか…

少し後悔。

十時になり、開店と同時に客がちらほらと。

のんびりと食べているのみで食い逃げしようという気配は皆無。

特に何事もなく午前は終了。

午後三時…

「…来た。」

一瞬で控え室に緊張が走る。

来店したのは二人組の男。

年は高校生ぐらいだろうか？

片っ端からケーキを頼んでいる。

「すっげえな…」

誰かがつぶやく。

それもそのはず、一つ食べたらずつ頼んでを繰り返して、回転寿司のようになっている。

「あ…俺、あの人パス…」

と、急に一人の男子が顔色を変えた。

「あ…俺も…」

また一人。

「ん？どうした？なんかあるのか？」

いぶかしげに野村が客をチエックする。

「……………スマン、俺もパスだ」

さあつと顔色が青くなる野村。

？ いったいなんだって言うんだ？

一部の人間を除いて皆その男二人組みに関わりたがらないようだ。

そのころ当の本人たちは……

「…よく食うなお前も…」

片方の男は二皿目のモンブランを突付きながら目の前の男の旺盛な食欲にため息をついた。

「おう。何せタダだからな」

「何もまだ決まったわけじゃないだろうに。つかまったら倍額支払うんだぞ」

頬張りながら「大丈夫だって」とジェスチャーをしている。

「ほえほりふおふいふいのふあ？くふあなくふえ？」

「飲み込んでから喋れ飲み込んでから」

口いっぱいに頬張ったケーキを紅茶で一気に押し込める。

「それよりもいいのか？食わなくて」

「ああ……さすがにお前の食いつぶり見てたら胸焼けがしてきたよ……」

このときの二人の戦績。

合計30皿

内訳…28対2

「食いすぎ……」

「そうか？」

ことも無げに次のケーキを注文している。

「まだ食うのか」

「いや、これはお土産だな」

「ほう？」

「今日野乃香ちゃん来れなかっただろ？だから持っていてやれ」
「悪いな」

「いいっていいって」と手を動かしながら紅茶を啜る。

しばらくして、ウェイターが箱に入ったケーキを持ってきた。

「ホレ、持っけ」

そういつて押し付けながら席を立った。

そのころの控え室…

「お！立ったぞ！」

「おお！？今行くか！？」

「バカ、まだ食い逃げして無いだろ！教室を出たらだよ」

「マジで行くのかお前ら…」

「おうよ！！あんなひよろそうなの一人や二人！！」

いつの間にか復活した相川がガッツポーズをして答えた。

…うわぁ、頼もしい。

『ありがとうございますー！』

えらくきれいにハモった声に驚くとウェイターとウェイトレスが一列に並んで彼らを見送っている。

「vipですか？」

一瞬はおつとその光景を見てしまった。

「鴨だぁー……カモネギだぁー……！！」

脱兎の如く飛び出して行く相川。

神速で二人の前行き行方をふさぐ。

「カモネギイイイイツイ！！！ゲツダゼエエエエエ！！！！」

「んー？」

出口から出ようとした二人のうち一人が胸ポケットから何かを取り出しながら相川の顔を見た。

「ふむ…『相川 樹…一年生』か…」

ピタ…

相川の動きが止まった。

胸から出したのは黒い手帳。

「出席番号一番…なるほど…家族は母親と父親と妹の四人暮らし」

ピク…止まっていた相川の肩が震える。

「趣味は…???が???で???をすることか…」

「わああああああああ！！！！！！」

突然奇声を上げる相川。

「な……なんでそれを…」

「さあ？何でだろうね？もうちょっとお話しようか…」
そう言つて相川を柱の影に連れて行った。

数分後…

「燃えたよ…燃えつきたあ…まつしろだあ…」

どこかのボクサーの用に灰になって帰ってきました。

「おい、こいつのところだけ何で背景白いんだ」

「背景どころか全部白いぞ」

ぐったりと控室の椅子にもたれかかり、力無くうなだれている。

その姿を見て、誰かが「立て！立つんだああああ！！」と絶叫している。

「まあ、あの人に挑んだんだから当然といえば当然だよな」

即座に飛び出すのをためらった生徒の一人がしみじみという。

「誰だっただんだ今の？」

「知らないのか？今の人は葉山 -」

途端「うぎゃああああああ！！！！！！いうなああ！！助けてええええ！！」と真つ白な背景から悲鳴が聞こえるが、無視した。

「葉山・巧つていつてまあ、人の弱みとかいろいろ握ってる人」

「一瞬金髪でピアスして銃火器乱射している『^{ファッキン}糞』が口癖の人を思い出してしまいましたか？」

「ん。たぶんその人であつて。実際ポケットに手帳忍ばせてるしね」

チラッと相川の方をみる。

いまだに頭を抱えて激しくのたうち回ってる様子を見るとかなりとんでもないような内容の秘密がばれていたんだらう。

南無。

「だから大抵はみんなすぐに逆らうことができなくなるってワケ」
「なるほどねえ」

「ゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイゴメンナサイ
イゴメンナサイ」

・ほんとにこいつはどんな秘密をばらされたんだ・・・

そんなこんなで、相川が再起不能のまま文化祭は終わりを迎えた。
そして、運命の集計。

「今回の売り上げは…」

ゴクリと誰かがつばを飲んだ。

「ひい、ふう、みい…」

「今から数えるんかい！」

「あははは、冗談冗談実際は56万とんで25円」

「エラく飛んでるなおい」

結局どうなんだろう。売り上げは一位だったんだろうか？

「結果はすぐにはわからないみたいだね、全クラス出し物が違うわけだし、そこら辺考慮して後日教えてくれるみたいだよ」

みんな緊張していたのだろうか、その一言で幾分か空気が和らいだ気がする。

「結局一位をとったとして、このお金はどうやって使うんだ？」

まあ、このぐらいは当然の質問だと思う。

『それは当然』

クラスが全員ハモった。

『口止め料だ』

先生までが声をそろえている。

「…まじっすか」

なんか、どっと、疲れた。

もう、かえって寝るとしよう。

荒れる貸衣装屋

「投票の結果・・・貸衣装屋に決定しました!!」

どつとわき上がる男性陣。

まあ、わからなくもない。

おそらく、男の趣味丸出しのものが混ざっているのだろう。

それとは対照的に女性陣は不満の声を上げている。

と、いうか、なんか俺をピンポイントに文句つけられてるんですが・

・

匿名性も何もないなほんとに・・・

「あつはつはつは!!南も男だもんなあ!？」

ばしばし叩きながら相川が笑っていた。

「色々あるぜえ?メイドに、巫女に制服に・・・」

「うっさい」

一言で叩き伏せようと右ストレートをたたき込む。

一瞬でそれを見切り軽く首を横にそらしてよける。

「・・・・」

「・・・・ふっ」

鼻で笑いやがった!!

「パンチというのはこう打つのだ!!」

言うが早いか、相川から放たれる高速のジャブ。

とっさに体制を低くして回避を試みるが、容赦ないその攻撃は空を切りながらも近くにいるクラスメイトを一発一人餌食にしていた・

・

「カモーーーン・ボオーーーイ」

「カーン！」

俺たちの間にのみ聞こえるゴングが今、鳴った・・・

とたんにお互いに距離をとり、相川は左腕をし字に曲げ振り子のように左右に振り右腕は顎をカバーするように構えている。

俗に言うヒットマンスタイル。

ざわっつと教室がざわめく・・・

そう、知る人ぞ知るあれは「死に神の鎌」

そこから放たれるフリッカージャブは逃れることは至難の業となる。

「クククク・・・」不気味に笑う相川。

心なしか、眉毛が真ん中に濃く寄っているような気がする・・・

対する俺は体を上下左右に揺らし、的を絞らせないようにする。

がっちりと腕を折りたたみ、顎、水月、をガードする。

じりじりとお互いの距離を縮めていく。一瞬早く相川が射程圏内に

俺をとらえた。「かはあつ！」

不気味な気合いとともに放たれる変則的なジャブ・フリッカー。

しなやかな筋肉が作り出す独特の軌道。

死神の鎌は一転鞭となって襲ってくる。

被弾しながらじりじりと前へ詰める。あと一歩で射程圏内。

じり、じり、じり。

フリッカーを全て被弾する覚悟で。

はいった！射程圏内！

一息に飛び込む。

爆発力の要は足の親指。

踏張りが効くからこそ、一瞬で距離をつめることが出来る。

肝臓！もらった！
リバー

左足で踏み込み、体の中心を独楽の軸のように回転させて撃つ。
当たれば悶絶は必至。

ヒットマンスタイルの弱点を突いた一撃は、しかし相川には届かず
空を切る。

「っち」

舌打ちをしていつのまにか取られていた距離を測り直す。
バックステップでいつのまにか逃げられていたのだ。

相変わらず振り子はリズムを刻み、南をチクチクと牽制する。

「ふう！」

短い気合いと共に再び飛び込む。

相川も距離をとろうとバックステップを…

取れなかった。

背中が急造のリングバー（机）にぶつかってしまったのだ。

「チイツ！」

逃げられないことを悟りフリッカーを繰り出す。

死神の鞭は容赦無く標的を叩くが獲物は中々怯まない。

上下左右小刻みにゆれる標的。

直線的な動きはやがて曲線を描きだし、有限な動きが無限の意味を
持つ軌道を刻む。

右へ左へ再び右へ。

振り子のように規則正しいそれは、しかし殺人的な威力を拳に乗せ
ている。

ギユバ！ギユバ！

奇妙な音は上履きのゴムと床が摩擦で上げる悲鳴。

「左右に振り子のように規則正しく動くこれはあー！！」

突然降ってわいた様に黒板の前に手書きで

「りんぐあな」

と書かれた札を机の上に乗せた学生が一人、これもまたどこからか
持ってきたのか（恐らく放送室）マイクを片手に実況を始めていた。

一瞬教室が静まりかえる。

突然の来訪者に視線が集まる。

それに気をよくしたのか、満足げに実況を続ける珍入者。

「実況は私、葉山巧！」

勢い良く自己紹介をして教室の廊下側を指差す。

「解説は日野 トウマがお送りします！！」

「おい、俺もかよ」

さあつと教室の温度が数度下がった様な気が生徒全員に感じられた。

「試合会場は一年C組にて、放送は全校放送でお送りします！」

ハイテンションな実況が試合（死合い？）を無駄に盛り上げる。

「お、入った」

すっかり忘れられていた二人に視線が戻る。

渾身の力をこめた左拳が見事に相川の肝臓にめり込んでいた。

「きょ～～～れつ！！南選手の凶悪な一撃が相川選手に突き刺さり
ましたあああ！」

歯をくいしばり、痛みに耐える相川に更に追撃の一撃が襲いかかる。

「～～～！」

とつさに顔面を両腕で守る。

（来るぞ来るぞ来るぞ！）

ガツチリとはをくいしばり、恐らく来るであろう最大の一撃に対する覚悟を決める。

最大の攻撃は防がれば最大の弱点に直結する。

つまり、次の一撃さえ防ぎきれば。

「…勝てる」

誰に聞かせるで目なくぼそりと言。

瞬間突然左側から一撃が撃ち込まれた。

「相川選手しっかりとガードしたあ！」

ガードを崩そうとした瞬間右側から激しい衝撃。

「南選手反撃をゆるさない！」

右、左、再び右。

容赦ない連打が襲いかかってくる。

(ーしかもこれは)

心の中で小さく舌打。

「デンプシーロールか」

解説者が一言。

「左右からの激しい連打！しかもそれが全てKO必至の一撃！」
実況が興奮したように巻くし立てる。

おおおおー！

教室が興奮の渦に飲まれる。

「お」

「おおおおー！！」

「ついにガードが崩れたああああああ！！右に！左に！また右に！！規則正しく顔がはじけとぶううううううう！！」

リングバー（机の塔）が激しく崩れ落ち、その上に相川が倒れ込む。実況席から飛び出してきた生徒が突然南の腕をつかみ高々と掲げる。その瞬間会場（教室）はけたたましい歓声に包まれた。

「えー、放送席放送席いーこちら勝利者の南選手です」

気分はノリノリのインタビュアーだ。

「どうですか！？因縁の相手を打ち倒した気分は！？」

「え…いや、あの…」しどろもどろ。

「なるほど！確かに強かった。また戦いたいと！！」

うんうん。なんて大げさに頷きながらインタビュをねつ造する。

「さてさて、敗者の相川選手ですが…」

胸ポケットからなにやら少し使い古された黒い手帳を持ち出した。さつ…と教室中の温度が下がる。

「？」

「お楽しみの暴露た~~~~~いむ！！」

ビクッと担架の上で瀕死の患者のようにしていた相川が跳ね起きる。

「えーーーーーっ」と

た後せつせと会場準備を開始した。

とは言つても、着替えのスペースと衣装置き場を作っただけで教室もいっぱいいっぱいになってしまったわけだが。

「すごいな…本当に何でもそろつてるように見えるから不思議だ…」
メイドにバニーガール、看護婦に巫女さん。

「…ほんとにいろいろあるな…てか、誰だ作つたやつは」

基本といわれるところからマニアックなところまで揃えられているらしい。

ぎりぎり開店は間に合つたわけだが、後は人が来るかどうかだ。

幸い撮影スペースは隣の教室を何故か無償で借りられたので、ありがたく使わせていただく。

「男、いらなくねえか？ここ…」

非常に居づらい。

なにせ9割方女性用の服だ。

なんて言うか、女性用下着売り場に迷い込んだみたいなの？

「外出てきます…」

そう言つて教室のドアを開けたところ何か見知つた顔が二人。

「あ」

「お」

「よっ」

驚き顔二人、ご機嫌顔一人。

今まさに入れ違いになろうとしていたのは先ほどまでのエセりんぐあなこと葉山巧と一緒にいた解説の生徒。

「さつきはおもしろいものを見せてもらつたけど、ここは何をやつてるんだ？」

教室の中を見回しながら興味津々と聞いてくる葉山…先輩

「貸衣装です、隣の部屋で撮影もできますよ」

「ほう…貸衣装ねえ…」ギラリと葉山…先輩の目が怪しく光った。

光の速さで衣装の列を駆け抜ける。

数分後、満足げな顔で帰ってきた。

「ありがとう!!」そう言つと興奮しながらいきなり俺の手を握ってきた。

ポケットから携帯電話を取り出して、どこかに掛けている。

「〜」

「どこに掛けてるんだ？」

いやにご機嫌な先輩に声を掛けるもう一人の先輩…確かヒノ・トウマといったつけ。

「んー？ノノカちゃんのこと」

もう、満面の笑みで返す先輩。

「ほう…」

ヒノ先輩は急に低い声を出して携帯電話を右手で握った。

ミシ…メキメキメキメキ…

パキン…

「あ…」

「…え？」

「ふん」

携帯電話、つぶれました。

「あーっとそうだな、いい店じゃないか？」

必死に今日の前で起きた現実から目をそらす葉山先輩。

「…」俺はあまりの光景に言葉を発せられなかった。

「確かにいろいろな服がそろってるな」

怒気を含みつつも感心した声で相づちを打つ。

「ただなあ…残念だ…ひじょーーーーーにざんねんだよ」

「な…なんです!？」

やばい、さっきの暴露でこの先輩の恐ろしさは身をもって相川が示してくれた。

まさか俺も赤裸々VTR+文字付き暴露の刑か!？

おれのおんなことやこんなことやあれもこれもどれも……！！

「チャイナドレスが無い！」

「……へ？」

「……」

「ちやいなどれす？」

「知らないか？中国の伝統的な服装だが
いやそれは知ってます。

てか、あるはず。

さつき見たし。

「ありますよ。そこら辺に」

指さしたところを逡巡するが、見つからなかったらしく落胆して戻ってくる。

「無いな……残念だ非常に残念だ。」

「はあ……」

ものすごく落胆している先輩。

なんかこのまま背景の一部になりそうだ。

「ふふふふふふふふふふふふふふ……」

どこからともなく聞こえる笑い声。

「ん？」

「お？」

声の出所は……着替えように作った個室の一つからだった。

勢いよく開かれたそこから出てきたのは。

「出番アルネエー……でべろつばああああ……！」

出現した瞬間吹き飛ばす二力。

反射的にハートブレイクショットとカエルパンチとドラゴンフィッシュブローの全方位からの必殺技を受けて沈む。

愛と勇気と正義の3プラン。

三人の背中には天（一人点）と書かれていたとかいないとか。

「なんでおれだけええええ……！」

叫びながら二階の窓から落ちていく相川君。

「死んだか？」

「死にましたね」

「むしろ死んどけ」

一人明らかな殺意を持って落ちた窓から下をのぞく。

「あ、生きてた」

..... チツ

誰だ！？今舌打ちしたの！？

振り返った瞬間クラス中の人みんな視線をそらした。

荒れる貸衣装屋（後書き）

何のネタが入っていたかわかる人はいたでしょうか？
結構好き放題やらせていただきました。

キャラは名無しの物語の人たちが壊れました。
ゴメンナサイ。

欲望渦巻くフリーマーケット

「投票の結果フリーマーケットに決定しました!!」
ぱちぱちぱちぱち…。

控えめな拍手が教室内に巻き起こる。

「なんだよお、貸衣装屋じゃないのかぁ…」

心底残念そうに頂垂れる相川。

この様子ではこいつはそっちに一票入れたのだろう。

「男子も女子も敵に回さずに済むのがこれしかなかったんだよ」

そう、どちらを選んだとしてもその後の学校生活が変わってしまう
気がするのだ。

大いに。

「では、各自持ってきている物を教室かその周辺にシートを引いて
露店を作りましょう」

委員長の掛け声でクラスはそろそろと遅すぎる準備を始めた。

「じゃ、俺も準備してくるな」

「おう、行つて来い」

軽く挨拶をして相川と別れる。

まあ、準備といっても教室の外の廊下にブルーシートを引いて自宅
周辺の人の家から分けてもらった不要物を並べるだけなんだけど。

数も無いし、ゆっくりと商品を陳列していると教室から声が聞こえ
てくる。

「あ、相川って何を持ってきたの？」

「…」

沈黙。

うわ、すごく嫌な気がしてきた。

「…フーイ」

「……………テヘ」

「死刑囚一名はいりマース」

『ヨロコンデー！』

「ぎゃああああああ！やめてええええ！！脱がさないでええええええー！！」

え。

悲痛な相川の叫びは、偶然教室の前を通ったほかのクラスの人が興味を示すほど壮絶な物だった。

覗かれそうになった瞬間にカーテン閉められてたけど。

「……………で、これはなんですか？」

目の前には首輪をしているメイドさんが一人、柱に首輪をくくりつけられている。

背中には大きく『いらつしやいませご主人様』の文字。

そのメイドさんは力なく項垂れながら地べたに座っている。

…普通に見てればそれなりに悪くない絵だろう。

剃り残しの髭さえ見えなければ……

しかも結構目立ってる。

「商品忘れたらしいから、罰ゲーム」

クラスの女子が嬉しそうに言った。

その手には貸し衣装屋で使うかもしれない衣装たちが数着握られていた。

「おおおお！起動全市ガンザム！！秋刀魚大聖デモンヘイン！！」
外から聞こえてくる雄叫び。

間違いなくその商品は俺が近所の方たちからいただいてきたプラモデルのタイトル。

できれば大声で言っただけで欲しくないんだけど……

「なんだ、このパチモンの匂いプンプンなプラモは……」

叫んでいた方に比べて大分落ち着いた…というか、呆れているような突っ込みも聞こえる。

「何を言う！確かにパチモノだが、発売三日で製造中止の上商品回収になった幻の一品たちだぞ！」

「何があつたんだ・・・」

「大人の事情だ」

「あ、葉山先輩と日野先輩ですか」

大声の主は葉山 巧。突込みをしているのは日野 トウマと云つてある意味ではこの高校でいちばん有名かもしれない二人だ。

「おー、お前のクラスだったのか南。ところで、このプラモドコで手に入れたんだ？ん？包み隠さず教えてもらおうか？」

「先輩、それ、脅迫」

「ん？」ちらちらと胸ポケットの中身を見せてくる先輩。

「近所の浪人生のお兄さんからイタダテキマシタデスハイ」

「他にもあるのか？」

「陸用堂の抜糸・ザ・スタンピードのフィギュアなら・・・」

「なにいいいい！！」

なんか、今先輩以外のところからも声が聞こえたんですが。

「む！？」

声を発した高校生と髭面メイドの間で一瞬火花が散った。

「南！俺にくれ！むしろ売ってくれ！初回限定幻の品あああああ
あ！！！！！！グエ！？」

首輪が柱に繋がれているのも忘れて陸上部も真っ青のスタートを切った瞬間首を吊って相川君撃沈。

南無。

「なんだ、あれ」

バケモノでも見るような眼で見ないで下さい。カワイソウナ子なんです。

「商品を忘れたから見たいですけどね」

「ほお…結構ひどいことするんだなお前のクラス」

あんたが言いますか。

言いながら抜糸・ザ・スタンピードのフィギュアを手取る葉山先

輩。

「いくらだ？」

「あー・・・そういやまだ決めてなかったけどこれくらいで
そう言つてピースサインのように指を二本立てる。」

「そうか！二万円かあ！」

即座にポケットをまさぐり財布を取り出す先輩。

中から新品の諭吉さんが飛び出してきました。

「いや、二千円です！二千円！」

諭吉さんを二人手にもっていた先輩の手が止まった。

「何・・・？」

何かまずったことでも言つたかな・・・？

まさか、俺の赤裸々な生活が全校生徒にばらされるとか！？

「ありがとう！！！」

「え？」

ガツチリと握つてくる先輩の両手。

うわ、すっげえうれしそうな顔してる。

「いや、しかし、これを二千円と言つのも・・・」

突然真剣に悩みだした。

その視線の先にはいまだに伸びてる髭面メイド。

「・・・あれは、商品か？」

一瞬何を聞かれたのか分からなかったけどとりあえずうなずく。

「いくらだ？」

「100円」

「買った！！」

「売った！！」

この瞬間俺は今日一日なら葉山先輩を味方につけられると確信した
！！

豊北高校一日最強伝説！！

「あー、これいくら？」

水を差すようなほのぼのとした声。

「2000円です」

声の先には教室内で犬の首輪を吟味している日野先輩の姿が。真剣に首輪を選んでいる。

「先輩の家って犬飼ってるんですか？」

「いや？あいつと妹の二人だけのはず・・・ハツまさかあああああ！！野々香ちゃんに首輪を付けて毎日あんな事やこんなことをおおおおお！！羨まし過ぎるぞ」

隣でさまざまな妄想と戦っている人を無視して、足元のメイドもどきを踏みつけて日野先輩の所へと向かう。

まさか、マジで妹さんにつけるのか・・・？

「いや、なーんか、近いうちに必要になる気がして・・・」

なんだろうかこの真剣な目つきは。

隣で伸びてる馬鹿とか、妄想で頭を抱えてのた打ち回ってる方々ならいざ知れずこの人は嘘言いそうに無いしなあ・・・。

と、いうか、首輪二つ買おうとしてるじゃないですか。

「これとこれをくれ」

「4000円です」間延びした声を出した女子にお金を渡し、赤と青の首輪をポケットに入れる。

「む？二つ？野々香ちゃんしか妹は居ないはずだし・・・ハツまさか！キサマアアア！！雨の日にダンボールの中のネコミミ少女を拾ったかああ！！」

この人、一応この高校で一番怖がられてるんだよね・・・？

「妹だけに留まらず、ネコミミまで手に入れて首輪を付けて毎日・・・つふつふつふ・・・」

なんか不適に笑い出したぞ・・・

「ふおおおおおお！！羨まし過ぎるじゃねえかあああああ！！譲れ！！猫耳で言いから俺に譲れ！！むしろ俺も一緒に飼って下さい！」

完全に壊れたよ、この人。

「よし、何ならこの出来そこないメイドと君の猫耳をトレードしよ

うじゃないか！」

「レートと需要を考える。誰がそんな髭欲しがるか。第一家には妹と俺しか居ないだろうが」

「ム・・・猫耳の妹も居るのかああああ！！！」

だめだ、完全にイツチャツタ。

「ねこみみイイイイイイ！イヌミミイイイ！！バンザーー！！
ーイ！！！」

髭面が起きた。

馬鹿（売却済み）が起きた。

「そうか！野々香ちゃんにイヌミミをつけてネコミミイヌミミバン
ザーーイ！！動物耳は永遠に不滅です！！！」

ミスター耳マニア。

「永遠に不滅です！！！」

ミスター耳マニア2（売り切れ）

「オイツ家には妹と俺だけだし、妹は野々香だけだ・・・お前の妄想
みたいな事はしていない」

…………ピシッ

ミスター（略）1号、2号の頭の中から何かがひび割れる音が聞こ
えてきた。

『あああ・・・俺（達）の固有結界アニマルイヤー・オブ・ヘヴン
があああああ』

なんですか、そのゴミにしかない癖にコストが高そうな特殊能
力は。

「ふふふ・・・燃えたよ・・・真っ白だあ・・・なんか前もこんな
事があった気がするうううう・・・」

妄想で頭の中身を受験勉強並に使い切ったメイドモドキはそのまま
前のめりに倒れそうになって、やっぱり首輪のせいで首を吊ってい
る。

うめき声が聞こえなかった分今回のほうが深く入ったらしい。

「なんだ、俺の勘違いか。」

こっちはずいぶん素直に立ち直ってる。

まあ、この冷め切った空気はどうにもならないみたいだけど。

「そうだよなあ、トウマがそんなことするわけないよなあ」

そう言いながらチラチラと胸ポケットをアピールするハヤマサマ。

なんて言うか、色々凄いですコノヒト。

胸のポケットの中身を知っている人は皆コクコクとうなずいている。

「で、こいつをどうするかだな」

目の前で首を吊ってるメイド（脛毛未処理）を見下ろして考える事数秒。

「これ以外に衣装は？」

「巫女服、シスター服、ナース服、女王様服、スク水（新・旧）その他もろもろ痒いと頃に手が届くラインナップでございます」

メガネを怪しく光らせながら委員長が答えた。

てか、お前は今までどこに隠れていやがた。

顔がほのかに赤くなっているんですが・・・こいつもアニマルイヤー・オブ・ヘヴンに当てられたのか・・・？

「そうか...では、スク水の準備を！！それと、付け毛と付け耳と髪剃りとシェービングクルイイイイムを持ってこい！！できれば胸パッドもだ！！」

葉山先輩の号令によって教室内外のフリーマーケット店舗から必要な物がどんどん掘り出されてきた。

ネコミミ、付け毛、剃刀、シェービングクリームはいいとして、誰だ、胸パットやら金的サポーターを中古で販売しようとした阿呆は・・・まさか、マジでそろうとは・・・」

頬を引きつらせつつ揃いも揃った物を眺める葉山先輩。

それも一瞬の事すぐにいつもの冷静沈着な顔に戻りクラス中を見回した。

「では、これよりこの無精髭メイドを立派なスク水少女に見た目だけでもしてやりたいと思う・・・」

大きく息を吸い込んだ。

「いくぞ、諸君！！」

『うおおおおおおお！！』

その日豊北高周辺に軽い地震が起きたと言う。

人ごみの上を舞う脱がされたメイド服。

シユウウウウ・・・白い泡が床屋などで見ることのできるような手付きで塗っていく。

脛に。

じより。

じより。

じよりじよりじより。

生半可に脛毛が硬く長いために恐ろしいほど分かりやすい音が響いてくる。

ある程度そり終わったところで水のみ場から持ってきた水をかけると、そこには真つ白な肌が蛍光灯の光を反射していた。

「うむ」

満足げにうなずく葉山と助手達。

続いて逆の足、両腕、両脇、髭と順順に男らしい毛が剃られていく。

「・・・」

そり終わり、つるつるになった相川の四肢をみながらも渋い顔の葉山先輩。

「・・・ここも、やっちゃおう？」

にこやかに、相川君の最後の髯を擦り下ろそうとしている。

「・・・（こくり）」

あ、女子が全員うなずいた。

男子にいたってはなんか、コンセント探してきて、あ、ヴィイイイイイイインって音がしてる。

「足の付け根まではそれでとうるとうるにするとして・・・」

「やはり、×はこれですか」

「ソレデスナ」

綺麗に洗って念入りに消毒（万が一傷つけたら大事のため）までし

た妖刀が怪しく輝いている。

「では、これより仕上げに入るとする。卑猥な表現が苦手な物は今すぐ此处から戻るように！！いいか！！戻るんだぞ！間違っても下を押したりドツラグしたりちよつとだけ・・・なんて下心を持つんじゃないぞ！！」

「サー・イエツサーーーー！！」

「あ、女子は向こう向いてて、さすがにトラウマになると困るからこいつが」

「・・・（興味津々の様子で首を振る）」

「あー・・・あつそ。まあいいか」

そういつて勢い良く最後の砦となるぬのつきれを擦り下げ、手際よくつけたゴム手袋にクリームをつけ濃密に生い茂った密林に重厚な雲を擦り付けていく。

「・・・ここつて、誰か剃った事あるか？」

・・・とてもこの場では言えそうにない質問を投げかけながら、黙々とクリームを塗りつけ、すぐ横で伐採の準備をしているこの世で最凶の切れ味を漏った妖刀。

「よし、こんなもんでいいだろう」

密林は今や雪が降ったかのように真っ白。

一昔前のコントとかでこんな事をやっていたのを見たような気がする・・・いや、実際に剃っては居ませんでしたよ？

「キャミソリの準備を」

「ハイ」

即座に渡される剃刀。執刀匠に機材を渡すようにタイムラグが無く滑らかに渡す。

ずおり・・・ズオリイイ・・・脛毛のときよりも生々しい音を教室中に響かせながら、暗黒の密林は徐々にただの禿山へと変貌していく。

「・・・む」

ぴたりと葉山の動きが止まる。

「キャミソリが・・・毛に負けた・・・」

どうやら切れ味が落ちてしまったらしく、次のキャミソリを催促して来る。

「どうぞ、キャミソリ二世・・・キャミソリイです」

見た目ただ新品の剃刀。

・・・もう、いい、何も言いませんよ・・・

ぞりぞりぞりぞりぞりぞりぞりぞりぞりぞり・・・

ジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリジヨリ・・・

ツンツンツン

「！！」

現場に居る男子が一瞬固まったのは言うまでも無いだろう。

「よし、こんな所か」

勢い良く水をぶっかけて禿山と化したそれは姿を表した。

「ふむ・・・我ながらいい仕事した。」

文字通り生まれたままの姿になった相川はいまだに気絶したまま。

ドライヤーで直に乾燥させられて、すでに準備されていたスク水（旧）をせっせと着せられていた。

しっかりとサポーターも忘れずに付けられている。

そして完成したスク水アイカワクン。

「・・・足りないな」

そこには毛という毛を髪の毛意外剃り落とされた哀れなスク水少女が居たのだが、葉山先輩にとってはそれはまだ納得のいくものではなかったらしい。

「・・・胸パッド」

「ヤー」

即座に渡される普通の胸パット。

慣れない手付きで両方入れて相川の方を二、三発叩く。

「むお？お？あれ？何で俺寝てるの？」

起き上がった相川・・・モトイ、スク水少年（ありとあらゆる物処理済）

「おめでとう、君は生まれ変わったんだ！さあ、これから第二の人生を味わうがいい！！」

ぱちぱちぱちぱち・・・温かい拍手に迎えられた少年は今までの色々と報われなかった人生を振り返り・・・泣いた。

頭をぱりぱりと掻きながら立ち上がり・・・

「アレ？なんか、すうすうする・・・」

不思議な違和感を感じていた。

なんというか包む物がなくなった変わりに何かがぴったりとフィットしていたり、胸には何かがついてるような気がしたり。

なぜか腕とかが滑々する。

「仕上げはこれだ」

そう言つて目にもとまらぬ早業で相川の頭上にネコミミと付け毛をつけて人間の耳をうまいぐわいに隠すと言う職人芸を披露するミスター動物耳一号。

「おお・・・」

男子女子その完成度の高さに一瞬呆けてしまうほど。

口々にため息が漏れる。

「ショートカットのネコミミ少女（旧スク水）」

「鏡だ！！鏡を持ってこい！！」

葉山の叫びにいち早く反応した数人が思い思いに鏡を探し出す。

さすが高校。

女子はすぐに鏡を見つけた。・・・というか自前の物を持って来ていた。

「さあ！！自分の顔を見てみるんだ！むしろ前進余す所無く見るんだ！」

葉山に進められて渋々自分の様子をチェックする。

「・・・！！」

すぐに頭に手を当てる。

「・・・！！！！（なかなか取れなくて慌てている）」

「アンアルファでくっ付いています」声高々にアンアルファを

持つて宣言する葉山。

「ぬおおおおおおお！！！！ネコミミが生えたああああああああ！！！」

マテコラ。

「どこの世界に急にネコミミが生える人間が居るんだ・・・」

トウマの的確な突っ込み。

「何を言う！！」とつさに反応する葉山。

「我々人間は目で見た情報を電気信号として脳に伝えてそれが『見えている』と錯覚させるのだ！！急に生えてくるのだって脳に直接そのような信号が送り込まれていれば不可能ではぬあああああ！！！！」

「・・・！！（腕の滑々感到驚き）」

「・・・いいのかそれで？」

「・・・？！！！！！！（腋毛、脛毛、髭が剃られている事に吃驚）」

「む？」

「その・・・どう頑張ってもそいつはネコミミ少女じゃなくってネコミミ少年だろ・・・？お前はそっちの趣味は無いんじゃないかなか？」

「・・・ぬあああ！！！」

「・・・（まさかと思い水着の下の密林を確かめる）」

「しまったああああああああ！！！」

「ぎゃああああああああ！！（禿山を見て絶叫）」
違う意味で絶叫する二人。

「相川・・・気にしちゃいけない。似合ってるぞ」

「ぼんぽんと肩を叩く委員長・・・いや、それ誉めてるのか？」

「いいんちよ・・・」

「・・・ぽ」

「・・・ポ？ナンデスカその効果音は・・・」

「なぜ顔を赤らめるううううう！！？」

「な！？誰が顔を赤らめているか！！」

「お前だお前このメガネ！！」

「な・・・そういうのなら自分の姿をもう一回良く見れば良い！！」
タイミングよく先程の鏡探しに行った男子が到着。

ドコから持って来たのか全身が写るタイプの鏡を持ってきた模様。

「どこから・・・」

「さあ！！見るが良い！！」

「俺が自分を見て、どうしろっていう・・・ん・・・だ・・・」
・・・」

声が徐々に小さくなる相川。

「・・・ぽ」

あ。

「・・・うぞだああああああ！！しっかりしろ俺！！」
頭を抱えてもだえ苦しむ。

あ、窓から逃げようとしてる。

「かえるううううう！！」

「待て」首の鎖を勢い良く引っ張られ再び沈黙。

「良く死なないなこいつ・・・で、何をしてるんだお前は」

「ん？いや、せつかくの傑作だからさ写真でも取って置こうかと思
つて。」

こうして相川君の新たなトラウマが刻まれる事となった。

欲望渦巻くフリーマーケット（後書き）

「名無しの物語」の登場人物の葉山君大活躍です。

コメ先生からはオツケイもらっているので問題はないのですが…壊しすぎたかもしれないですね。

…本編よりすごく書きやすかったです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1405a/>

SOULEATER番外編-嵐の文化祭-

2010年10月28日03時14分発行